



自転車 BMX 日本代表

瀬古遥加

SEKO HARUKA

1996年、三重県桑名市生まれ。至学館大学在学中。兄の影響で6歳の頃BMXをはじめ。本格的に全国の大会へ参戦しはじめたのは8歳ごろ。11歳の時、全日本選手権で優勝、初出場した世界選手権では6位入賞。その後、4度の世界選手権に出場し、最高位は2位。17歳からBMX強化指定選手となり、ワールドカップやアジア選手権に参戦し始める。2015年から最高カテゴリーとなるEliteクラスで参戦。海外のレースへ転戦している。所属チームは「IRC TIRE」。



BMXとは
Bicycle Motocrossの略。20インチ径ホイールを持つ競技用自転車とその競技をいう。スタートヒルと呼ばれる高さ8mの地点から8人が一斉にスタートし、300~400m程度つづら折りになったコース上に大小形状の異なるジャンプセクションやバームと呼ばれるカーブが設定されたコースで着順を競う競技。

自分の目標をしっかり決めて、それをクリアするという強い気持ちを持てば、「恐怖心」は克服できる。後に続く選手たちを引っ張っていきながら、BMXを盛り上げていきたい！

自転車に乗って、ものすごいスピードでコースを走り、ジャンプし、カーブを曲がる。転倒すればかすり傷ではすまない…。瀬古遥加さんは、そんなBMXレースの選手とは思えない小柄でかわいらしい女子大生。ほんわかとした雰囲気でのインタビューの中に、レースの過酷さとBMX選手としての葛藤と志が見えました。

BMXに乗った瞬間、楽しかった。初出場以来、ほぼ表彰台に立つ

BMXをはじめたのは小学校1年生のときです。2つ年上の兄がやっていて、家の近くにコースができたので父に連れて行ってもらったのがきっかけでした。ちょうど自転車に乗れるようになったタイミングだったので、BMXに乗った瞬間、すごく楽しかった記憶があります。レース用とは別に、子ども用のコースがあって、ぐるぐると何度も回っていました。ジャパンシリーズに初めて参戦したのは3年生のとき。以来出場するレースではほとんど表彰台に立っていました。選手の数も少なかったこともありですが、表彰台にいつも立っていたから続けられたと思います。その頃は怖いもの知らずでケガを恐れることもなく、ただ走るのが楽しかったですね。

窮地に立たされつつも準優勝。五輪をめざすきっかけに

印象に残っているレースはたくさんありますが、15歳のときにデンマークで行われた世界選手権です。まだアマチュアで15歳の女子だけのクラスでした。15歳というと中学校3年生で、周りのみんなはグンと身長が高くなっていてたんです。でも私はぜんぜん身長が伸びなくて小さいまま。しかも前年の世界選手権には参戦していなかったのでも、「みんな速くなってきているかな、表彰台に立つのは無理かな」と弱気でした。予選は3回あって、その合計ポイントで準決勝進出が決まるんですけど、1回目で転倒してしまっただけです。そして予選3回目で1位か2位を獲得しなければ準決勝に進出できないという窮地に立ちました。

プレッシャーの中、1位になることができ、なんとか準決勝に進出できました。不利な外側からのスタートだったんですが、それまでで一番いいスタート

ートを切れて、準決勝でも1位になれたんです。うれしくて思わず泣いてしまいました。

決勝では、はじめ不安だった気持ちにも、ひよっとして勝てるんじゃないかという自信が出てきて、周りの選手から「この子、小さいから年齢違うんじゃない？遅いんじゃない？」と思われていたんじゃないかと勝手に妄想して、負けず嫌いの血が騒ぎはじめました(笑)。

結果は準優勝でした。日本人で、15歳で表彰台に立ったのは初めてのことでした。その時初めて五輪に出たいという気持ちが湧き上がってきました。

「お前のやりたいことをやればいい」両親の後押しでプロを決意

アマチュアからプロになったのは17歳のときです。プロになるかどうか、とても悩みました。五輪を目指すには、レベルの高いコーチに指導してもらわなければならぬし、五輪に出場するためにはポイントを稼ぐため、たくさんのお金が必要になります。でも両親は「お前のやりたいことをやればいい。応援するよ」と言ってくれました。特に母は「レースするだけじゃなく、いろんな経験ができると思う。あんた負けず嫌いな



だから後悔するよ」と背中を押してくれて、さすが私の性格を分かっているなって思いました(笑)。後に続く後輩たちのためにも、やってみるだけやってみようという決意をしました。少しでもお金を作ろうと高校1年生の時からお寿司屋さんでアルバイトをはじめ、今でも続けています。自分でお寿司を握ったりもします！

「恐怖心」と戦いながら、自分を奮い立たせる。転倒が続き、

プロになってからは「恐怖心」との戦いでした。海外のコースは、日本に比べて急勾配です。2016年の五輪の最終選考となったコロンビアで行われた世界選手権のコースは、8mの高さからスタートして下まで全力でこいだ後に、10m弱のジャンプを飛ばなくてはいいけません。2016年は特に転倒が多くて、脱臼がクセになっていました。骨が削れたことも、頭をぶつけて記憶が飛んでしまったことも

